

「アンサンブルと平和」

～戦争ほど悲惨なものはない、平和ほど尊いものはない～

「平和」は、みるとが音楽活動をしていく上での最も大切なテーマなのですが、今日は自分自身が、再確認するために書かせて頂こうと思いました。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、みるとは2001年9月11日に起きた同時多発テロ事件がきっかけで奮起しました。この事件を目の当たりにし、その衝撃と自分の無力さに対する悔しさなどから、自身の音楽活動を通して少しでも平和への貢献をしていこうと思うようになったのです。

当然ながらみるとは、ジョン・レノンやハービー・ハンコックのように、世界的に強い影響力を持っているわけではありません。もちろん、ゆくゆくは彼らのようなアーティストになりたいと願っていますが、みるとはまだまだ発展途上です。そんな自分ですが「From One's Heart」と題した自主企画の平和コンサートや、未来を担う子供たちとの平和の尊さについての対話など、今出来ることを実行するように心がけています。

しかし、そういう具体的な活動以外にも実は普段の音楽活動の中に、「平和への実践」があったりするんです。

例えば、「アンサンブルをする」という事もその一つだと思っています。

演奏者が2人以上いれば、それぞれ異なる感性や主張があります。感性の違いや主張のぶつかりが発生したとき、どう対処するか。自分の感性を押し付けてしまう人、自分を押し殺してしまう人、最悪の場合は、アンサンブルが成り立たなくなるといった問題などもあると思います。そこで、お互いの違いを認め合い、歩み寄り調和していくことができれば、本当の意味での良いアンサンブルになっていくと思うのです。

大げさな言い方と思うかもしれませんが、これは平和の縮図ともいえるのではないのでしょうか。なぜなら、こういった問題は音楽に限らず、人間関係や民族同士、あるいは国と国の間にも当てはまる事だからです。それぞれが掲げる「主張」や「正義」が異なるからこそ、紛争などの問題が今なお続いています。だからこそ、異なる感性同士が調和し一つの形を成す「アンサンブル」は、一つの平和の実現なんです。

みるとの音楽のスタイルは、他楽器とのアンサンブルです。これまでも、様々なアーティストとの共演をさせていただいていますが、その人たちを「単なる伴奏者」とは思わないように努めています(伴奏者という発想が決して悪いわけではありません。あくまでもみると自身の活動スタンスです)。

まず最初に、一人一人が「自分」を持ったアーティストであるという事を尊重することからはじまるので、共演者の特性に応じると自身も演奏も変化します。しかし、もしそこで相手の色に染まりきってしまうと、今度は「みるとのオカリナ」という主軸を見失ってしまうでしょう。だからこそ共演者がどんな楽器でもそれを尊重しながらも「みるとワールドがそこにある」と感じてもらえるような演奏、ステージを心がけています。

自分の感性ばかり押し付け、相手の感性を死なせてしまうのではなく、かといって、自己犠牲でもありません。「互いに歩みよる」という事こそが真のコラボレーション、調和だと思っています。アーティストたちのそういう姿から、平和の波動が広がり、やがて、人種を超えた人間同士の調和へと繋がってほしいと願い、日々活動しています。

特別な事を意識しなくても、良いアンサンブルをする事そのものが平和の縮図なんだと考えると、つくづく音楽って素晴らしいなと思います。きっと、オカリナのアンサンブルを笑顔で楽しんでいる方々の間にも調和があり、そこからまた平和への波動が広がっているのでしょうね。

音楽には言葉の壁を越え、国境もこえ、人々の心に直接響く大きな力があります。しかし、それほどの力があるからこそ、悪用されるケースもありました。良くも悪くも使うことが出来てしまうからこそ、ミュージシャン自身が、「音楽を善の方向に持っていく」という意識を持つことが大切だと思います。また、音楽家である前に一人の人間としてやれる事もたくさんあるという事を忘れないように、この先も心がけていきたいと思っています。

こんなにも素晴らしい音楽に携われる事に感謝しながら、今日からまた頑張っていきたいと思っています。最後まで読んでくださり本当にありがとうございました。